



## コロナ禍と業務

海外協力部長 稲本 龍生

令和2年度の海外協力部の業務は例年と一変し、海外渡航はおろか、相手国の担当者との連絡すら、先方の自宅待機や交代勤務のためもある程度まで進まない状態が続いている。メールベースでできるだけ前向きな話をするものの、少々込み入った提案となるとなかなか返事が来ない。会って直接念を押せない中で、日本側が空回りする感は否めないが、せめて、先方への支援を準備し、いつ渡航が可能になってもよいよう準備を進めようと考えている。

また、海外の育種事情を調査して将来の協力案件につなげる事情調査や、途上国の担当者が日本に興味を持ち、面識や人脈を作ってもらはずの受入研修にも、コロナの流行を挟んで空白ができつつある。途上国での感染収束は見通しにくいものの、中にはいち早く渡航が再開されそうな国もあり、リモート対応も含め、状況にあわせた迅速な行動が必要となっている。

反面、影響が小さい面もある。コロナ禍で対面の報告や営業がテレビ会議やメールに変わり、挨拶回りや歓迎会も取り止めなど職場の習慣が随分変わったが、海外セクションの環境ではさほど違和感はない。国内でできる室内試験も開始した。更にこの際、対外コミュニケーションツールの強

化を考え、育種センターの英語版パンフレットを見直す作業を始めている。

すると、英文パンフに制度や業界用語(の訳語)あるいは我が国特有の話題が当たり前のごとく使われ、結果、海外読者には内容が伝わりにくいのではということに改めて感じた。我が国でお約束の業界用語は、それを聞いたこともない人から見てどのように表現されるものなのか、松くい虫や花粉症をどう語るか。

コロナ禍で、様々なサラリーマン社会の不文律が消滅し、より「プレーンな」社会になってきた。仕事ひとつ始めるにも、広く世の中を見渡してその必要性を淡々と説き起こさなければならない。習慣や前例によらず説明し、同意を促し、共感を呼び起こす力が問われる。

この状況はパンフ改定と重なって見える。常識の通用しない相手に対して、我々職員が臆せず自らの立場を説明し、説得し、味方につけていく能力が向上するかもしれない。また、それは人口が減りつつある我が国の社会が体質を転換し、伸びていく一つの契機かもしれない。コロナ禍はすべてを「禍」と捉えず、そこをどう進むかにかかっているのではと自問している。

### 【紙面紹介】

無花粉スギ系統のカタログ化……………	2	林木ジーンバンクに保存された種子の形質データの公開…	6
土を使わずミスト散水でさし穂を発根させる技術		地元中学生が職場体験……………	7
「エアざし」の開発…………	3	林業研究・技術開発推進ブロック会議育種分科会と	
早生広葉樹の育苗技術の開発に向けて		特定母樹等普及促進会議を開催…………	8
—ユリノキ、チャンチンの効果的な種子精選方法—		みどりの女神が林木育種センター、	
……………	4~5	森林バイオ研究センターを視察…………	8



国立研究開発法人 森林研究・整備機構  
森林総合研究所林木育種センター

Forest Tree Breeding Center, Forestry and Forest Products Research Institute